様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１８５０２

研究課題名（和文）促音（重子音）に関する学際的・国際的共同研究のためのネットワーク形成

研究課題名（英文）Network formation for interdisciplinary and international studies of geminate consonants

研究代表者
窪薗　晴夫（KUBOZONO, HARUO）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・理論・対照研究領域・教授

研究者番号：８０１５３３２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではこれまで複数の研究領域で独立してなされてきた促音の研究を融合するために、言語学・音声学・言語心理学・発達心理学・実験心理学・日本語教育学/教育学、音楽の研究者を集めたシンポジウムを開催し、国内研究ネットワークを構築した。また日本語の促音を世界諸言語の中で理解するために、他言語の促音（重子音）研究を行っている海外の研究者を招聘して国際シンポジウムを開催し、各言語における促音(重子音)研究の課題と研究進捗状況について意見・情報の交換を行い、国際共同研究を行う基盤を整えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、これまで複数の研究領域で独立してなされてきた促音の研究を融合し、分野の壁を超えた共同研究の体制を整えたことである。また日本語の促音を重子音やリズムの研究と位置づけ、海外の研究者達との交流・意見交換を通じて、国際共同研究を行う基盤を整えた。

研究成果の概要（英文）：This study established a collaborative research network whereby researchers on geminate consonants in Japanese and other languages can collaborate with each other and understand geminate consonants better from the perspectives of interdisciplinary and international perspectives. The interdisciplinary network involves specialists in linguistics, phonetics, psycholinguistics, developmental psychology and music. The international network involves researchers on Japanese, Italian, Barber and many other languages with a contrast in consonant length.

研究分野：言語学

キーワード：促音　重子音　日本語　対照研究　ネットワーク形成　モーラ　リズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本語の促音「っ」は「来て－切って」などの意味の違いを引き起こす音であり、日本語音声の中でもとりわけ難しい音とされる。この特殊性は日本語教育の世界でもよく知られており、また言語獲得の研究においても、促音の獲得がとりわけ困難な作業であることが近年指摘されている。その一方で、促音に関する研究は学問領域を超えた融合が図られておらず、音韻論（言語学)、実験音声学（音声学)、音声知覚（言語心理学、実験心理学)、言語獲得（発達心理学)、言語教育（日本語教育学)、音楽等の分野で別々に行われてきている。

２．研究の目的

上記のような状況を背景に、本研究はこれまで複数の研究領域で独立してなされてきた促音の研究を融合し、分野の壁を超えた共同研究の体制・ネットワークを構築することを目指す。また日本語の促音を世界諸言語の中で理解するために、他言語の促音（重子音）研究を行っている海外の研究者と国際共同研究を行う基盤を整える。

３．研究の方法

上記の研究目的を達成するために、(1)国内における促音研究の異分野統合と、(2)海外の重子音研究者とのネットワーク作りが必須となる。(1)を具体化するために下記の(A)を、(2)については(B)の計画をそれぞれ実施する。

(A)国内ネットワークを確立するために、まず国内研究協力者と打ち合わせを行い、それをもとに言語学・音声学・言語心理学・発達心理学・実験心理学・日本語教育学/教育学、音楽の研究者を集めたシンポジウムを開催する。初年度は「諸分野における日本語促音の研究」を主テーマとする。このシンポジウムを通して、日本語促音に関する研究課題を明らかにする。

(B)海外の研究者を含めた国際シンポジウムを開催し、各言語における促音(重子音)研究の課題と研究進捗状況について意見・情報の交換を行う。

４．研究成果

(1) 促音に関するネットワーク形成のために、まず国内の研究協力者を集めてキックオフワークショップを開催した（2018 年 3 月 4 日、早稲田大学)。このワーク ショップでは以下の５件の発表により、日本語の促音を音韻論・音声学（借用語音韻論、実験音韻論)、生理学、日本語教育、音楽の各視点から考察し、今後の研究課題を明らかにした：「借用語音韻論と促音」（窪薗晴夫、国立国語研究所)、「実験音韻論と促音」（川原繁人、慶應義塾大学)、「生理学的手法から見た促音」（松井理直、大阪保健医療大学)、「日本語教育と促音」（戸田貴子、早稲田大学)、「音楽と促音」（坂井康子、甲南女子大学)。 たとえば借用語音韻論の分野では、cap（キャップ）-captain（キャプテン）や fax（ファックス）-facsimile（ファクシミリ）に見られるような位置効果（借用 語の語末では促音が生じやすいが、語中では生じにくいという現象）について音韻論と実験音声学の両面から説明がなされている。その一方で、fax（ファック ス）や max（マックス）のような[-ks]では促音が生じやすいのに対し、fact（ファクト）や mask（マスク）などの[-kt], [-sk]では促音が生じにくいという現象があり、これに対する十分な説明がなされていないということが明らかとなった。今後このような研究課題を一つずつ検討していく必要がある。音楽の分野においても、曲が作られた時代、地域（作曲家の出身地)、歌の種類、促音の種類（摩擦音、閉鎖音）などにより、促音の歌い方にバリエーションが 見られることが明らかとなった。

(2) ２年目は国際的なネットワークを構築するために、2018 年 10 月 26-28 日の 3 日間、国際シンポジウム ICPP 2018 (The 5th International Conference on Phonetics and Phonology)を東

京（国立国語研究所）で開催し、その前半に促音のセッション３つとポスターセッションを企画した。海外から 3 件、国内から 3 件の口頭発表に加え、国内外から十数件のポスター発表があった。 特に英国オックスフォード大学の Aditi Lahiri 教授による基調講演（Geminates: Diachronic, synchronic and experimental perspectives）とフランス・ソ ルボンヌ大学の Rachid Ridouane 教授による基調講演（Gemination in normal and whistled speech）は世界諸言語に観察される重子音の多様性と、重子音研究のさまざまな視点・方法論を解説したもので、日本語の促音研究に対しても示唆に富むものであった。またコルゲート大学の Yukari Hirata 教授による講演 （Acoustic and perceptual evaluation of Japanese geminates produced by L2 learner）は日本語の促音の教育的側面に関するもので、日本語の促音研究の射程を広げるものであった。3 日間の国際シンポジウムを通じて、国内外の促音（重子音）研究者のネットワークを広げることができた。 研究代表者自らも、促音を含む日本語（東京方言、鹿児島方言）の音節構造に関する研究成果を学会発表し、また論文として公刊した。

(3) ３年目（最終年度）は、研究の視点を広げ、促音（重子音）を日本語のモーラ構造、リズム構造という視点から考察した。韓国の研究者との共同研究として、句末・節末の 長音化に着目して日本語のアクセントとモーラ構造の関係を分析し、日本語のモーラの特性と、英語や韓国語との異同を明らかにした。この研究は国際会議 (International Congress of Phonetic Sciences) での共同発表と、アメリカ音響学会誌 Journal of the Acoustical society of America への論文掲載という形 で結実した。また、日本語の呼びかけイントネーションや応援音頭に見られる母音長の中和とアクセントの中和を分析し、限られた音韻環境において中和が起こることを明らかにした。この成果は韓国における国際ワークショップと国内のワークショップで発表し、国内のジャーナルに投稿・刊行した。さらに、オノマトペ（擬声語、擬態語）と赤ちゃん言葉の異同を分析する中で、日本語においてモーラが果たす役割を明らかにした。この成果は海外の出版社（John Benjamin 社）から出版された論文集に掲載された。 これらの学会発表、論文刊行と並行して、国内で 3 日間の国際シンポジウム(The 6th International Conference on Phonetics and Phonology)をカリフォルニア大学サンタクルズ校と合同で開催した。計 130 名の研究者を集めたこの会議では、50 名近い海外からの研究者の参加を得て、計 61 件の研究発表があったが、この中には促音やモーラ、リズムに関係する研究も多数含まれている。またソウル大学言語学科と共催で国際ワークショップを開催し、日本語と韓国語の異同につ いて議論する場を提供した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Haruo Kubozono	４．巻 88
２．論文標題 Prosodic evidence for syllable structure in Japanese	５．発行年 2018年
３．雑誌名 MIT Working Papers in Linguistics	６．最初と最後の頁 35-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Haruo Kubozono	４．巻 NA
２．論文標題 Loanword accent of Kyungsang Korean: A moraic analysis	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Topics in Theoretical Asian Linguistics	６．最初と最後の頁 303-329
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/la.250.15kub	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Haruo Kubozono	４．巻 NA
２．論文標題 Mora sensitivity in Kagoshima Japanese: Evidence from no contraction	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Hana-bana: A Festschrift for Junko Ito and Armin Mester	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 窪薗晴夫	４．巻 40
２．論文標題 日本語のリズム	５．発行年 2017年
３．雑誌名 AJALT	６．最初と最後の頁 26-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 窪薗晴夫	4．巻 -
2．論文標題 どうして赤ちゃん言葉とオノマトペは似ているの？	5．発行年 2017年
3．雑誌名 オノマトペの謎	6．最初と最後の頁 121-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Haruo Kubozono	4．巻 -
2．論文標題 The phonological structure of Japanese mimetics and motherese	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Ideophones, Mimetics and Expressives	6．最初と最後の頁 35-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/ill.16.03kub	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 3.Seo, J., S. Kim, H. Kubozono, and T. Cho	4．巻 146
2．論文標題 Preboundary lengthening in Japanese: To what extent does lexical pitch accent and moraic structure matter?	5．発行年 2019年
3．雑誌名 The Journal of the Acoustical Society of America	6．最初と最後の頁 1817-1823
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1121/1.5122191	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Haruo Kubozono	4．巻 12
2．論文標題 Neutralizations in vowel length and word accent in Japanese	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Kobe Papers in Linguistics	6．最初と最後の頁 69-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Haruo Kubozono
２．発表標題 Evidence against superheavy syllables in Japanese: Quantity sensitivity in Tokyo and Kagoshima Japanese
３．学会等名 7th International Conference on Phonology and Morphology（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Seo, J., S. Kim, H. Kubozono, and T. Cho
２．発表標題 Effects of mora, lexical pitch accent, and focus on Japanese preboundary lengthening
３．学会等名 26th Japanese/Korean Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 窪薗晴夫
２．発表標題 借用語音韻論と促音
３．学会等名 促音ワークショップ
４．発表年 2018年

１．発表者名 窪薗晴夫
２．発表標題 日本語におけるアクセントと母音長の中和について
３．学会等名 Kobe-NINJAL-Oxford言語学コロキウム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Seo, J., S. Kim, H. Kubozono, and T. Cho.
２．発表標題 Interaction between rhythmic structure and preboundary lengthening in Japanese
３．学会等名 19th International Congress of Phonetic Sciences（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Haruo Kubozono
２．発表標題 Word accent and vowel length in the postlexical phonology of Japanese
３．学会等名 JK27 Satellite Workshop（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 窪薗晴夫	４．発行年 2017年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 165
３．書名 オノマトペの謎	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考